

真の国際人 — 嘉納治五郎 —

東京オリンピック開催が決定した直後、ベルリンで嘉納治五郎は語った。

「私が生んだオリンピック・ムーブメントは、ついに実を結ぶことができた。従来のオリンピックは欧米だけで開催され、オリンピックの本当の意義を発揮できなかったが、今回の第十二回大会は東京で行うことになった。これによってオリンピックが真に世界的なものとなる。同時に日本の真の姿を外国に知らせることができるので、二重の意味で愉快である。」

嘉納七十五歳、国際オリンピック委員会（IOC）の委員に就任してから、はや二十五年が経っていた。

二十五年前の明治四十二年（一九〇九年）、東京高等師範学校の校長をしていた嘉納に、突然、駐日フランス大使が会見を申し込んできた。用件は、IOC委員になつて欲しいということだった。

フランスのクーベルタンは同志と共にIOCを組織し、古代オリンピックゆかりの地アテネで一八九六年に第一回オリンピック大会を開催していた。国際オリンピック委員会は、欧米の委員で組織されており、アジアからの委員は一人もいなかった。嘉納はこの申し出を躊躇ちゆうちよすることなく受け入れた。アジア初のIOC委員の誕生だった。

次の年、嘉納のもとにクーベルタンから、二年後に行われる第五回ストックホルム大会参加の勧誘が届けられた。

「古代オリンピックがギリシャ民族の精神性を築いたように、近代オリンピックは世界各国の思想感情を融和し、世界の文明と平和を助くるものだ。また勝敗を超越して、相互に交流を深め、親善関係を深めるこ

とができる。」

そう考えて、嘉納は、参加を決意した。

ところが、代表選手を送ろうにも、選考会の組織も何もなかった。そこで嘉納は、選手の派遣と国民体育の振興の二つをねらいとして、さまざまな苦労の末、新たに「大日本体育協会」を立ち上げた。それが日本で初めて創られた体育団体だった。

初めてのオリンピックへの派遣選手はわずか二名であったが、参加を重ねるにつれて人数も増え、入賞やメダルを獲得する数も増し、次第に日本国民の間にオリンピックに対する理解も広がっていった。

そこへ、東京市会がオリンピック開催要望を決議した。昭和十五年（一九四〇年）の第十二回オリンピックを東京で開催したいというのだ。この時嘉納はすでに七十一歳になっていたが、IOC委員としてオリンピック招致活動に動き始めた。

嘉納は、IOC総会で、東京開催の場合の組織、競技場、経費について説明したり、日本のスポーツ写真を配布して招致活動を行った。また、船での長旅をもとめせず、世界を飛び回り、各国のIOC委員と個別に面談するなど、東京への招致を目指して奮闘を続けた。しかし、日本開催を反対するIOC委員は実に多かった。

「ヨーロッパから日本に行くには、船でアフリカ、インド洋を経て日本に行くか、北米回りの航路か、またはシベリア鉄道でソ連を横断して日本に入るかのいずれかのコースだ。いずれにしても二十日間近くもかかる。費用もかかりすぎる。」

と言うのだ。それに対して、嘉納は決然として言った。

「そのような遠距離から、日本は明治四十五年（一九一二年）以来、毎大会多くの選手を派遣しています。ヨーロッパの選手が日本に集まることで、オリンピックが欧米のものから世界のものになるのではありません。」

んか。」

実に流暢な英語での反論であった。相手の論理を自分の論理に引き寄せたのである。相手の力に逆らわずして勝つという柔道の理念そのものだった。そして、オリンピックの東京開催が決まった。

嘉納には、オリンピックを真に世界的な文化にするべきだという強い思いがあった。それは、講道館柔道によって形成された武道的精神とオリンピック精神を融合させるといふ考えであった。嘉納の武道的精神は、身体と共に心を練り、そこで得たものを社会に応用していくことを目指すものであった。オリンピック精神は、スポーツを通して心身を向上させ、さらには文化・国籍など様々な差異を越え、友情、連帯感、フェアプレーの精神を持って理解し合うことで、平和でよりよい世界の実現に貢献するものである、とクーパーベルタンが提唱している。嘉納は、これこそまさに、自分が抱く理念と同じであり、二つの精神の融合によって、オリンピックが真の世界の文化になると確信した。

嘉納は、これまでの自分の柔道の道、教育者としての道、IOC委員としての道を、静かに振り返った。

嘉納は万延元年（一八六〇年）、兵庫県御影の酒造業の三男に生まれ、十二歳で東京に移り、明治六年（一八七三年）、育英義塾の寄宿舎に入った。明治維新からまだ日も浅く、武術で鍛えた者が幅をきかせていた。生来負けず嫌いの嘉納は、学問では誰にも負けなかったが、小柄で虚弱な身体であったため、腕力でも勝ちたいと思って柔術の道場に通い始めた。

熱心に稽古を続けていくうちに、体が強健になり、また、癩癩もちで容易に激するたちであった自分に自制心がついてきたことに気付いた。嘉納は、柔術は相当の工夫をすれば、心と体の教育の手段に有効であるという確信を得た。そして、二十一歳の時、これまでの柔術を改良して、北稻荷町永昌寺において講道館柔道を創始したのだった。

東京大学を卒業して、学習院や熊本第五高等学校に勤めた嘉納は、積極的に柔道を取り入れていった。三十三歳で東京高等師範学校の校長になると、青少年の体を強くするのはもちろんのこと精神的な向上を図るのは、体育・スポーツだと考え、生徒に陸上大運動会・長距離走・水泳実習などを行わせた。そして、柔道部や剣道部などとともに、ローンテニス部、フットボール部、ベースボール部、ラグビー部など西洋スポーツも課外運動部に取り入れた。

青少年に柔道や長距離走、水泳実習などの体育を行わせることは、体を強くさせるだけでなく、常に正々堂々とし、公正公平に身を処し、驕りたかぶらない精神を向上させることができる。嘉納は考えた。これこそ伝統的な武道に流れている精神だ。多くの卒業生たちがこの精神を全国各地に広げていった。

嘉納は、オリンピックの東京開催を勝ち取って安堵の思いで、会場となったホテルのロビーに出てきた。走り寄ってきた記者に満面の笑みを見せ、大きくうなずいた。そこには嘉納の面目躍如たるものがあった。

* * *



氷川丸船上の嘉納治五郎（右端）

嘉納の半生を捧げたといってもよい第十二回東京オリンピックは、幻のオリンピックとなった。嘉納が亡くなって二ヶ月後、戦時色が濃くなる中、日本は大会開催を返上した。

日本が再びオリンピック開催に名乗りを上げたのは、戦後のことであった。

その折に、誘致のためのスピーチをしたのは、カイロからの帰途、氷川丸の船上で帰らぬ人となった嘉納治五郎の臨終に立ち会った平沢和重だった。平沢はこんな演説をした。小学校六年生の国語の教科書を右手に高くかざして。

「日本では、小学校の教科書にも、オリンピックの精神が説かれています。日本の子どもたちは、その目でオリンピックを見ることを、どれほど待ち望んでいるでしょう。日本をFar East（極東）と呼びますが、ジェット機が飛ぶ今では、もはやFar（遠い）ではありません。遠いのは国同士、人同士の理解です。西洋に咲いたオリンピックという花を東洋でも咲かせていただきたいのです。」

会場は万雷の拍手に包まれた。ここに嘉納の心は受



け継がれた。

昭和三十九年（一九六四年）十月十日、真つ青な空に白い輪がくるりくるりと五つ描かれ五輪となり、ギリシャを発ち各国をリレーした聖火が、聖火台に点火され、勢いよく燃え上がった。アジアで最初となった念願の東京オリンピックの開催である。日本選手は赤のブレザーに白のスカート・白のスボン、日章旗を先頭に堂々の入場行進をした。そして、柔道がオリンピック史上初めて正式種目となった。嘉納治五郎没後二十六年後のことである。